

聖書：Iサムエル5：1～12

説教題：ダゴンは主の箱の前に

日時：2015年11月8日

今日の章は前の章の続きです。4章でイスラエルはペリシテ人にまさかの敗北を喫しました。一回目の戦いに敗れた時、彼らは互いに問いました。「なぜこんな結果になっただろう。」そして結論しました。「そうだ。主の契約の箱を持って行こう！神の箱が我々の陣営のただ中にあれば、主がその場に臨んでくださり、我々は勝利できるに違いない！」ところが結果は信じがたい大敗北でした。1回目の戦いでは4000人が倒れましたが、2回目は3万人も倒れてしまいました。しかも神の箱まで敵に持ち去られてしまいました。祭司エリはこのことがショックで死んでしまい、その子ピネハスの妻もショックの内に死にます。彼女は生まれた子に「栄光がイスラエルから去った」という意味の「イ・カボデ」という名をつけました。イスラエルはまさに「栄光が去った」という絶望的な状態に置かれたのです。

さて主の契約の箱はペリシテ人の地でどうだったのかというのが今日の箇所に関心です。ペリシテ人は神の箱を、彼らの町の一つアシュドデに運びます。ペリシテ人はご存知のように、5つの強力な都市を持っていました。6章17節にそのリストが出て来ますようにアシュドデ、カザ、アシュケロン、ガテ、エクロンの5つでした。その中でもアシュドデは中心的な町だったのでしょう。彼らはその町の彼らの神ダゴンの神殿に主の箱を運び入れます。当時は征服した者たちが、捕らえた民の神々を自分たちの神殿に置くというのは一般的な習慣だったようです。これは拝むためではなく、戦利品としてでしょう。ダゴンの神に敗れ、ダゴンの神に征服された無力な異国の神としてそこに陳列され、一層ダゴンに栄光あらしめるためでしょう。

ところが次の日、朝早く起きて見ると、異変が起きていました。何と我らが神、征服者ダゴンが倒れている！しかも主の箱の前にうつぶせに！まるでダゴンが主に対してひれ伏して礼拝しているかのようなポーズです。ペリシテ人は何かの間違いではないかと考え、ダゴンを取り、元のところに戻します。しかし次の日はもっとひどい状態でした。ダゴンはまたしても主の箱の前にうつぶせに倒れています。そして今回は頭と両腕

が切り離され、胴体だけがそこに残っていました。当時の世界では頭や手を胴体から切り離すことは、圧倒的な勝利・征服のしるしでした。後のダビデもあのゴリヤテに打ち勝って、そのようにする話が出て来ます。

これは何を意味しているでしょう。それは主はペリシテの神に捕えられた形になっていましたが、決してダゴンよりも弱い神、劣る神ではないということです。むしろダゴンの方が主の前では全く無力。ひざまずいて礼拝することしかできない。いやその御前では存在し続けることさえできない。バラバラに切り離されてしまっている。主は先の4章では無力な方に見えましたが、そうではなかったのです。ここに真に生ける神、力ある神はどちらなのかがはっきり示されているのです。

主の活動はそれで終わりません。その手はさらにアシュドデの町の人々の上に重くのしかかります。人々は腫物で打たれます。次の6章の5節には腫物とセットで「この地を荒らしたねずみ」という言葉が出てきますから、この腫物はねずみが媒介したものであったのかもしれませんが。人々はこの有様を見て直感します。これは神の箱がこの町にあるからだ！あれをこの町に運び込んだために、イスラエルの神が怒っておられるのだ！だからこれを他の場所へ移さなくてはならない！ペリシテの領主たちは集まって討議し、ガテに移すことを決議します。ところが次にはガテの町に主の手が下ります。9節：「それがガテに移されて後、主の手はこの町に下り、非常な大恐慌を引き起こし、この町の人々を、上の者から下の者もみな打ったので、彼らに種物ができた。」そこで彼らは次の町エクロンへ神の箱を送ります。しかしエクロンの人々は愚かではありません。彼らは10節で箱が到着した時に大声で反対して言います。「私たちのところにイスラエルの神の箱を回して、私たちと、この民を殺すのか。」このように神の箱が行くところすべてに、主の手は非常に重くのしかかり、ペリシテ人の叫びは天にまで上ったのです。

以上の記事はどんなメッセージを私たちに語っているのでしょうか。それは何と云ってもまずイスラエルの神の優越性・卓越性でしょう。前の4章で主は弱々しく見えました。敵に持ち去られ、異教の神の宮に安置され、今や単なる飾り物のようでした。しかし人々はこの章に主の圧倒的な勝利のお姿を見なければなりません。ダゴンがうつぶせになっ

ているのを発見したペリシテ人は目をパチクリさせて、急いで彼らの神を直してあげなければなりません。果たしてそのように人間のお世話になり、人間に修復してもらわなければならないものが神なののでしょうか。イスラエル人はこの記事を読んで、お腹を抱えて大笑いしたでしょう。実にこういう偶像の現実こそ、預言者たちが繰り返し嘲笑したところです。イザヤ書 44 章 9 節以下：「偶像を造る者はみな、むなしい。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。だれが、いったい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鑄たのだろうか。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。」 エレミヤ書 10 章 3 節以下：「それは、林から切り出された木、木工が、なたで造った物にすぎない。それは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。それは、きゅうり畑のかかしのようで、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。」

しかしイスラエルは今日の箇所を、ただ大笑いして読めば良いのでしょうか。この記事を見る時に問わなければならないことは、主はこのように力強い神なのに、どうしてイスラエルは先の戦いで負けたのかということです。この 5 章から分かることは、それは主の力が弱かったからではないということです。考えられる答えは一つ。それはイスラエルの側に問題があったということです。

前回、イスラエルの問題として 2 つのことを見ました。一つは神を操作しようとした罪でした。彼らは主の契約の箱を戦地に持って行けば、主は我々のために力を発揮して下さるだろうと考えました。これは自分に都合の良い時に神に都合良く働いてもらおうとする態度であり、神よりも上に立って神を意のままに操ろうとする姿と言えます。主はそのように人間に都合良く利用されるあり方を拒否されるのです。

そしてイスラエルにはそれよりも大きなもう一つの問題がありました。それは前回 7 章 3 節を参照しましたように、彼らの中に偶像礼拝の罪があったことです。その重大な罪をそのままにしておきながら、ただ神の箱を運ぶことによって神から祝福をいただくとしても、そうは問屋が下ろさない。ですから神はイスラエルに祝福を与えなかったのです。まず御前における彼らの罪が先に取り扱われなければならなかったのです。

ですからイスラエルは今日の箇所の出来事を知って、ペリシテ人のこっけいな姿を笑い飛ばすのではなく、自らを省みて恥じ入らなければなりません。主はこのように力強い神であり、いつでも勝利を与えることができる方なのに、その方が勝利をくださらなかったとは、何と我々がふさわしくない霊的状态にあったことを意味するか、と。我々の愚かさが、主の栄光の御力を引き止め、自分たちに働かないようにさせてしまった、と。

そしてイスラエルはこの章における主のお姿を良く見るべきです。主はここで一人で栄光を現しておられます。主はイスラエルを通してでなければ栄光を現かせない方ではない。主は栄光を現わすためにイスラエルの協力が必要な方ではない。主は誰にも縛られておらず、全く自由であられ、ご自身一人で栄光を現わし、名誉を保つことができるのです。イスラエルと離れて一人でペリシテ人の地で栄光を現わし、ご自身の御名が賛美されるようにすることができますのです。時々私たちは自分を特別な存在と考え過ぎて、この私抜きでは主の栄光は現されないかのように考えるかもしれません。主の栄光は私にかかっていると自負し過ぎているかもしれません。しかし主はあなた抜きで栄光を現わすことができるのです。あなたに問題があればあなたを用いなくても、また私に問題があれば私を用いなくても、別の仕方でご自身の栄光を現わすことができるのです。

ですから私たちは誤った自負心は捨てて、この真の主権者の前にへりくだるべきでしょう。主がこれまで私たちの神としてともにいてくださり、私たちを用いて栄光を現わしてくださったのは、私たちが主の栄光のためには欠かせない存在だからではありません。主はただ恵みによって、私たちを用いてくださっているだけなのです。ですから私たちが御前に正しくないなら、罪を保ったままなら、主を上から使おうという尊大な態度を取るなら、主は私たちからさっと離れて行く。そして私たちを蚊帳の外において、ご自身の栄光を現わされるのです。

このことに照らして私たちのすべきことは何でしょうか。それは御前における自らの霊的状态を振り返って悔い改め、主のあわれみを乞い願うことでしょうか。主の赦しを請うて、主が再び戻って来て下さるように祈ることでしょうか。私たちにとってのグッド・

ニュースは、主は次の章で再びイスラエルに戻って来てくださるということです。そこに主があわれみの主であられることが示されます。しかし私たちはそれで良しとして、同じ罪を繰り返すようであってはなりません。今度こそ主が喜んで私たちとともにいてくださるよう、そして私たちの中で栄光を現わしてくださるよう、主の御言葉に聞き従う者でなければなりません。そうする者には、今日の章も大きな励ましを与えてくれる記事となります。なぜなら私たちとともにいてくださる主は、異国の地においても、様々な敵に囲まれても、このような圧倒的な力を持ち、またそれを発揮されるお方だからです。たとえ私たちが多くの問題に囲まれ、様々な困難な状況に置かれても、私たちとともにいてくださるのはこのような力ある主であり、この方がご自身のご計画に従って最も良い道へと、より頼む民を導いてくださると信じて従って行くことができるからです。